



熊が脅かす「普通の暮らし」 中山間地に広がる影響と将来への不安

OKB総研 委嘱コンサルタント

河合 達郎 氏（一般社団法人 ^{やまなび}山学 代表理事）

子ども食堂の近くで…

夏日を記録した4月の日曜日の昼過ぎ。岐阜県本巣市北部の山あい、月1回ペースで開いている子ども・地域食堂の終わりが近づいてきた時だった。駐車場で交通整理をしていたボランティアの方が、焦った様子で会場に飛び込んできた。開け放していた玄関扉を後ろ手で閉め、中に向かって大声で叫んだ。

熊が出た——。

2025年度は、全国各地で「熊問題」がクローズアップされた。過去最悪の人的被害、被害を目撃した人々の生々しい証言、「こんなところに現れるなんて」というニュースに、地方に暮らす多くの人たちが恐怖心を覚えたことだろう。

今年も熊の活動が活発化する季節を迎えた。中山間地という人間と野生動物との接点にあたる場所で、熊はいま人々の暮らしにどのような影響を与え、そこではどんな不安が渦巻いているのか。その実態と、将来への課題を紐解いてみたい。



熊が目撃された地域の集落

田んぼを駆け、 国道を横切り、山の方へ

その日、熊が目撃されたのは、子ども食堂会場からわずか100mあまりの場所だった。駐車場で交通整理に当たっていたボランティアスタッフや、ちょうど食事を終えて帰ろうとしていた方など、複数の人たちが目撃者になった。熊は、田植え前の田んぼを駆け、国道を横切り、山の方へと入っていったという。

私はその時、来場者の受付のため会場入口にいた。切迫した様子で第一報を知らせてくれたボランティアの方とともに、訪れていた人たちにはしばらく施設内にとどまってもらうよう

呼びかけた。

目撃者が迅速に通報してくれたおかげで、すぐに行政無線から「熊らしき動物」の目撃情報が放送された。通りがかった近所の方が車内から撮影した動画も、会場内の人たちの間で共有されていった。そこには、まぎれもなく真っ黒な熊の姿が映っていた。ほどなく2人の警察官もやってきた。複数の目撃証言を聞き、動画を確認すると、「「らしき」ではなく、熊です」。

この山あいでは、熊の目撃情報は決して珍しいことではない。だが、自分自身の見慣れた風景の中に、そして子どもを含めて多数の人たちが集まる場所の至近でその姿を確認した

ことで、警戒感と恐怖心はまた一段高まった。

2026年度も 死者数は高い水準に

こうして熊が日常生活を脅かすシーンは昨年、全国各地で相次いだ。環境省のまとめによれば、2025年度のクマによる人身被害者数は238人、そのうち死者数は13人に上り、2006年の統計開始以来で過去最悪の被害数となった。「玄関先で襲われた」「市街地にも出没した」といった衝撃的な事案がたびたび報じられ、社会全体に大きな不安と恐怖が広がった。

2026年度に入っても、それは決して「過去の騒動」にはなっていない。

環境省が公表している「クマによる人身被害件数（速報値）」によれば、7月末時点で被害者数は53人、うち死者数は6人に上る。前年度の記録的な件数と比較すると少なく見えるが、死者数はすでに高い水準に達している。2025年度の人身被害は秋に集中しており、被害者数もまだこれから増える可能性がある。

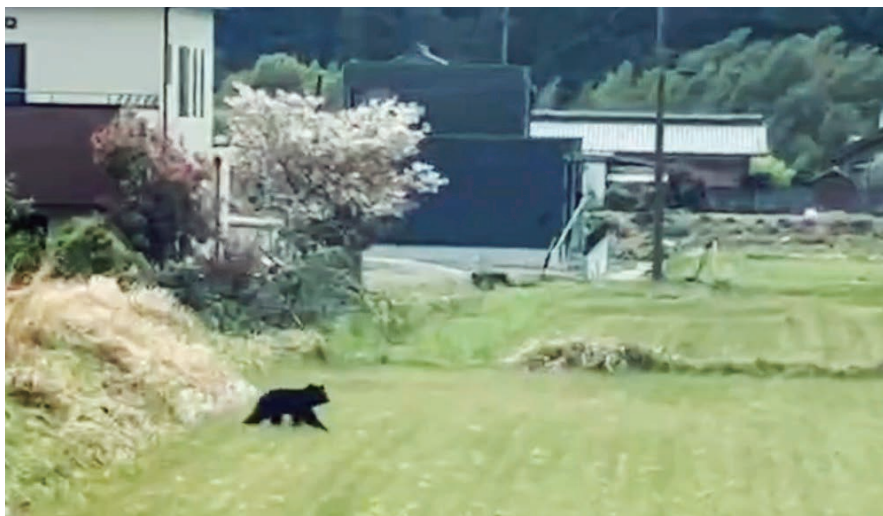
経済活動や子どもたちに及ぶ実害と心理的影響

では、こうした熊問題は山あいの暮らしにどんな影響を与えているのか。私たちが拠点にする岐阜県本巣市北部やその周辺市町の山あいでも、日常生活のさまざまな場面に影響が及んでいる。

まず、経済活動への影響だ。昨秋、ある飲食店のすぐ裏にある山すそで、熊が目撃された。ちょうど全国的に熊被害の注目が高まっているさなかの出来事で、うろつく熊の様子が撮影されていたこともあり、ニュースで報じられる事態になった。警察や報道陣が押し寄せ、猟友会によって罠が仕掛けられるという物々しい状況も伝わり、その期間に客足が遠のくという実害が出た。

地域行事への影響もある。この地域では、住民たちでつくる地域団体が毎年秋にウォーキング大会を開いている。10年超にわたって続いており、地域の小学生たちも学校行事として参加する一大イベントだ。

この大会では10km超の山道を歩く。だが2024年の大会では、直前にコース周辺で熊の目撃情報が相次ぎ、小学校は学校行事としての参加



熊の目撃映像の一コマ（撮影者の許可を得て掲載）



国道側から見た子ども食堂会場（写真左奥）



を見送り、自主参加の形に切り替えた。続く2025年も、全国的な熊問題への警戒感から、前日と当日朝にコース上の数か所で爆竹を鳴らす対策がとられた。大会中のコース上でも、スタッフが参加者と歩きながら空砲ピストルを打ち鳴らす場面があった。

2026年もウォーク大会の開催が計画されているが、参加者を募集するチラシの表面に、赤字で「広報車にて先導します」「花火やピストルなどで熊対策をします」といった文言が明記された。参加者の懸念を考慮し、新たに付け加えられた形だ。

山あいでの活動においては、熊対策は今やそのイベントを開くための大前提として組み込まれるようになっていく。

子どもたちの日常生活の端々にも、熊の存在がにじむ。私たち山学がローカル線の無人駅で開く学習支援には、これまで自転車でやってくる中学生や高校生もいた。だが、熊への警戒感が広がり、わずかな距離であっても保護者に車で送迎されてくる機会が増えた。やむを得ず自転車

で来た日には、帰り際、周囲の友だちやスタッフが「熊に気を付けて」と声をかけるのが恒例のようにになっている。

周辺の集落では昨秋、熊の影響で草刈りが中止になることもあった。草刈りを予定していた茂みの中に、熊のものと見られるフンが見つかったためだ。あたりは柿畑が広がる場所で、一步間違えば、農作業者が鉢合わせになる可能性もあった。

いつどこで遭遇するかわからない、という警戒感は、子どもだけではなく、もちろん大人にも広がっている。行事の縮小や中止という目に見える影響にとどまらず、いつ遭遇するかわからないという不安が、日常生活を少しずつ窮屈にしている。

熊対策と地域の特色のはざまで

2025年の熊問題を受け、国が対応に乗り出しているのは周知のとおりだ。自治体でも各地で独自の取り組みが見られ、岐阜県は2025年11月、犬の鳴き声や花火で熊を集落から追い払うドローンの導入を発表した。

そのほか全国の自治体を見渡してみると、例えば複数の自治体において、熊を人里に引き寄せる要因となっている柿や栗などの不要果樹を伐採するための補助事業が進められている。

柿や栗は、この中山間地でもなじみ深い農作物だ。シーズンになると、地元の道の駅には立派で大きな柿や栗がたくさん並び、県外ナンバーの車も含めて多くの人がやってくる。それらは単なる農作物というだけでなく、この土地の季節を彩る風物詩であり、地域の人々にとっては昔ながらのなりわいであり、地域固有の特色でもある。

不要果樹の伐採は、熊を集落に引き寄せないための有効な対策だ。一方で、管理する人の高齢化や担い手不足が進む地域では、伐採をきっかけに、柿や栗を育てる営みそのものが途絶えていく可能性もある。

あくまで「不要」な果樹を伐採するだけだから、地域の特色に影響はないという見方もあるだろう。だが少なくとも私の周囲には、「先祖が残してく



10kmの山道を歩くウォーキング大会



小学生はランドセルに熊鈴を取り付けて登下校

れた果樹だから」と、苦勞をしながら管理をしている人たちがたくさんいる。「高齢でもう長くは栽培できない」といながらも、何とか栽培を続けている人たちもいる。そうした人たちが「これを機に」と、栽培をやめてしまうのではないかという懸念もある。

山あいの人たちの命と暮らしを守るための対策だと理解できるからこそ、余計にもどかしさを覚える。私のいるこの周辺地域で実際に行われている対策ではないが、当該地域では同様の懸念が想像される。安全を守りながら、地域のなりわいをどう支えていくのか。その両立まで考える必要がある。

「普通に暮らす」ことが脅かされる

こうして考えると、熊問題は中山間地に対し、「これから先もここで『普通の暮らし』を送っていけるのか」という問いを突き付けているように思えてくる。ひいては、その地域の持続性にかかわる問題でもある。

人と熊との接点にあたる中山間地

では、「熊は近くにいるものだ」という意識が人々に根付いている。だが、人と熊との境界線はここ数年で、急速に私たちの生活圏へと押し迫ってきた。

子どもたちが自由に自転車で出かけられない。イベントでは熊対策の負担と不安がのしかかる。地域の特徴であるなりわいの継続が危ぶまれる——。こうした窮屈さは、「ここに暮らしてみたい・暮らし続けたい」という選択を躊躇させる要因になりかねない。

だからこそ、この熊問題で考えるべきは、「熊からいかにして身を守るのか」という緊急的な対策にとどまらず、「中山間地でこれからも暮らしを営んでいくためには何が必要なのか」という問いではないだろうか。安全対策はもちろん、地域の持続性までも含めて考えたい。

熊が身近にいる地域でも、人々が「普通に暮らせる」環境をどう守っていくのか。警戒の秋を再び迎えた今、目先の対策にとどまらず、この問いに向き合う必要がある。



一般社団法人 山学 代表理事 河合 達郎 氏

1987年5月3日 岐阜市生まれ
2006年3月 岐阜県立岐阜北高等学校 卒業
2010年3月 立命館大学国際関係学部 卒業

職歴

- 株式会社朝日新聞社 (2010年4月～2021年3月)
- 岐阜県本巣市地域おこし協力隊 (2021年4月～2024年3月)
- フリーライター、編集者 (2021年4月～現在)
2024年3月より、朝日新聞岐阜県版でコラム「無人駅から」連載中。
- tete. (2023年5月～現在)
いちじくの栽培／加工／販売
- 一般社団法人 山学 代表理事 (2024年3月～現在)
学習支援／地域食堂／自然体験
ローカル線・樽見鉄道の無人駅で開く学習支援の継続に向け法人化。本巣市内の30代3人で設立。中山間地の子どもに焦点を当てた活動を展開する。



山学レポート



いちじく農園「tete.」の
ホームページ



いちじく農園「tete.」の
Instagram



本巣市北部の山林では、熊に樹皮を剥がされないようビニールひもが巻き付けられている場所も